



学習支援の活性化について語る
加藤・宮崎・川上さん（左から）

一同 それは面白い。有効な手立てかも。

“需要”の多い特別支援に絞っていえば、どうでしょう。

加藤 学科の指導補助というより、ハンデのある子どもたちの面倒をみてあげる、付き添ってあげる、という側面が強い。しかも、1人1人の個性が強いので一律のやり方が通用しない。そこがむずかしい。

川上 逆に、そこにシルバーの出番がある。若い担任だと、どうしていいかわからなくなってしまう、というところがあります。年の功でうまくしのげることも多いのですよ。

特別支援の講習会、見学会を

宮崎 ですから、すべて経験です。難しいことをやるのではありません。そっと付き添ってあげる、だけです。一度体験したらよくわかります。具体的にどんなことをやるのか、講習会や見学会を開くのも効果的かもしれませんね。

- 小学校で英語の時間が増えます。「ハーワーユー」の一言で子供たちの雰囲気明るくなる。英語の支援要請は増えるのでは？

加藤 ところが170校中、3割程度しか市教委に支援申請がないのです。大半は学校独自で英語教育を進めるという姿勢です。

川上 学校現場が忙しすぎて、英語教育の優先度が低いということがあると思う。でも、これからは英語支援に力を入れていく必要がある。英語に堪能な人が多いカレッジ生は、きっと求められる人材だと思いますよ。

ビデオ教材を作っては

学習支援の歩み H16年、カレッジ生が西区樋谷小で算数などの授業補助を始め、好評だったのがきっかけ。H17年7月、中沢保夫さんがグループわの事業としてやってはどうかと、提案。現在の制度となった。各学科の指導のほか、昔の暮らし・戦争などの語り部、障害を持つ子どもたちの世話をする特別支援がある。

戦争体験を語れる人がどんどん減っています。
加藤 今の子はおじいちゃん・おばあちゃんとのふれあいが少ない。昔の暮らしや遊び・戦争を語れるのはシルバー世代の強みですが、高齢化も進んでいる。今のうちに、ビデオに撮って教材にしておくという方法もある。

宮崎 子供たちの映像への興味・関心は高い。戦争の話だけでなく、環境問題なども映像化して提供できたら、と思います。

川上 ライブラリーとして、揃えたらニーズも高まるでしょうね。実際に制作するとなると、かなりの手間隙がかかりますが。

加藤 実現に向けて取り組みましょう。

- 学習支援をやってよかった、と思う時は？

宮崎 行ったら楽しい。子供たちが待っていてくれる。いつも元気ももらって帰ってきます。「今度はいつ来てくれるの？」との言葉に弱いんです。

川上 ボランティアをしているな、と実感できる。第2の人生でこういうことができるのは、本当にやりがいがある。

加藤 子どもとの触れ合いは楽しい。学習支援を通じて私も勉強させてもらっています。

子供たちを温かく見守ることは、シルバー世代の使命です。きょうのお話を一つでも、二つでも生かし、学習支援の輪を広げていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

（座談会は9月3日に実施。まとめは広報の南形徹が担当）

学習支援委員会 支援登録をした人と学校側の橋渡しをしている。H22年7月現在、97人が支援者登録しているが実働者は5割程度の50人。活動日数は平均月2回。5年間で要請校、支援校とも2倍になり、世話した児童は延べ3万人を超えた。このほか、昔遊びメンバーなどがスポット的に支援活動をしている。